

第4室 仏具 展示解説

N-242 舍利塔（しゃりとう）

釈尊の遺骨とされる舍利を奉安する金銅（こんどう）製の容器です。基壇上に伏鉢（ふくばち）形の塔身を置き、火焰宝珠（かえんほうじゅ）付きの相輪を備えた方形造（ほうぎょうづくり）の屋根を戴（いただ）く宝塔形に作られています。『古今目録抄（ここんもくろくしょう）』（N-18）によれば、もとは法隆寺東院（とういん）の舍利殿（しゃりでん）に安置されていたようです。木製の基壇の裏の銘文から、法隆寺の役僧であった覚厳（かくごん）によって保延4年（1138）に造立（ぞうりゅう）されたことがわかります。

N-70 玳瑁張経台（たいまいばりきょうだい）

低い床脚（しょうきゃく）に畳摺（たたみずり）と呼ばれる枠をつけた長方形の台です。もとは「細字法華経（さいじほけきょう）」（N-7）や「玉荘箱（ぎょくそうばこ）」（N-89）を載せていたと伝えられています。天板には、蘇芳（すおう）で染めた黒柿（くろがき）を矧（は）ぎ合わせ、天板の四周や框（かまち）には細く割った斑竹（はんちく）を並べて貼っています。床脚に貼られた華角（かかく。牛角、玳瑁などを薄く削（そ）いだもの）には、緑色の地に鳥や樹木などが描かれており、細部に到るまで美しく装飾が施されています。

N-89 玉荘箱（ぎょくそうばこ）

玉荘箱は、天平宝字5年（761）の『法隆寺東院資財帳（ほうりゅうじとういんしざいちょう）』に記される、天平14年（742）に聖武天皇の夫人・橘古那可智（たちばなのこなち ?～759）が奉納した経箱に当たると考えられます。合口造（あいくちづくり）で、各面に梅もしくは桜の樹皮を貼って朽木（くちぎ）のように仕上げ、紫檀（したん）の押縁（おしぶち）に真珠と緑色のガラス玉を交互に飾っています。表面には金泥（きんでい）による水波文様（もんよう）が描かれていることが、エックス線透過撮影調査で確かめられています。「細字法華経（さいじほけきょう）」（N-7）付属の経筒を納め、「玳瑁張経台（たいまいばりきょうだい）」（N-70）に載せられていたと伝えられています。

N-300 葛箱（かずらばこ）

もとは被蓋造（かぶせぶたづくり）の箱の身に当たる部分で、いまは蓋を失っています。細い葛を並べ、その周囲に細く裂（さ）いた葛の皮を巻きつけながら編み上げて各面を作り、口には竹製の縁を、細い籐（とう）を巻きつけて留めています。全面を蘇芳（すおう）で赤く染めてから漆を塗り、側面には二重菱（にじゅうびし）と四菱繫（つな）ぎの文様

(もんよう)を編み出しています。達磨大師(だるまだいし)所用と伝えられる「袈裟(けさ)」(N-35)が納められていました。

N-284 如意(にょい)

如意は、「孫の手」から転じた仏具で、これを用いると「意の如く」になることから命名されたと考えられます。羅漢図(らかんず)などにそうした用途での使用の様子が表されていますが、実際には法会(ほうえ)の際にこれを手に執(と)り、威儀(いぎ)を正すのに用いられました。本品は水牛の角(つの)製で、上端の爪頭(つめがしら)と呼ばれる部分が小さく、全体に細身の作りとなっており、奈良時代以前の特徴が顕著に現れています。

N-286 麈尾(しゅび)

麈尾は大鹿の尾の毛を挟木(きょうぎ)に挟んで、団扇(うちわ)形に切り揃え、柄を取り付けたものを本義としています。鹿の群れでは大鹿の尾の動きを見て、群れが続くことから、仏教では僧がこれを持って人々を導くための道具とされました。この作品は唐木(からぎ)を呉竹(くれたけ)の形に彫り、黒漆(くろうるし)塗りで仕上げていますが、毛はすべて失われています。聖徳太子が飛鳥京の橘寺(たちばなでら)で勝鬘経(しょうまんぎょう)を講讃(こうさん)した際に用いたと伝えられる品で、平安時代の記録には鹿ではなく猪(いのしし)の毛が使われていたと記されています。

N-241-1 百万塔(ひゃくまんとう)

天平宝字8年(764)の藤原仲麻呂(恵美押勝〔えみのおしかつ〕)の乱の後、称徳天皇(在位 764~770)の発願(ほつがん)で滅罪と鎮護国家のために製作された、木製、轆轤挽(ろくろびき)の三重小塔です。相輪部分が蓋となる塔身上部から縦に穿(うが)たれた筒状の孔(あな)には、年代の明らかな現存世界最古の印刷物として著名な陀羅尼(だらに)が納入されていましたが、法隆寺献納宝物中の48基の百万塔ではすべて失われているのが惜しまれます。